

第25回 附属図書館貴重資料展

# 永青文庫の源氏物語の中から

徳 岡 涼



今年は、『源氏物語』が、『紫式部日記』に記され、文献に登場してから千年とされる。各地でも源氏物語に関連した催しが多くなされている。

熊本大学附属図書館でも、10月30・31

日、及び11月1日にかけて、寄託されている永青文庫の源氏物語に関する典籍の展示と、最終日には、森正人教授の「源氏物語と住吉の姫君」、また、私も「永青文庫の源氏物語」と題して講演をさせていただいた。

この企画展示を支援してくださった、永青文庫と熊本大学附属図書館の方々、そして、展示や講演会にお運びいただいた多くの方々に篤く御礼を申し上げます。

さて、今回は、26点にのぼる典籍を展示したが、その概要について触れておきたい。

企画をスタートさせた段階から「源氏物語前後の物語文学」、「源氏物語の書写本」、「源氏物語の享受（古注釈を中心とする）の様相」と三ブロックで構成することは即決であった。どのブロックにも、細川幽斎筆にかかる典籍が配されているが、やはり「源氏物語の書写本」「源氏物語の享受の様相」の中には、この千年紀に相応しい典籍が集中した。

「源氏物語の書写本」には、幽斎筆『源氏物語』がある。紅白梅蒔絵筆筥に収められ、書物自体の装丁も打曇りに金泥で瀟洒な草花林泉文様のそれはひととき目を引く。これらは江戸期の製作にか

かるものの、書写本自体は、源氏本文を書写した上で、注の書き入れがなされ、幽斎の勉学の様を辿ることが出来る。これらの書き入れ注は、幽斎独自のものも見受けられるが、以下のような理由から書写された源氏物語古注釈に拠るものが多い。

幽斎は、中世期に次々と書き著された源氏物語の古注釈書の集成を企図していたが、自身では果たすことはなく、勅勘を蒙って幽斎の元に身を寄せた中院通勝の手によって『岷江入楚』として大成された。この間、幽斎は通勝とともに、当代の古典学者の家、三条西家から様々な源氏物語古注を借り出し手分けし、書写に努める。細川家の源氏学の基礎たるこれらの古注釈書『河海抄』『花鳥余情』『源語秘訣抄』『弄花抄』も蔵されており、「源氏物語の享受」のブロックに配された。

また、幽斎は寄合書（源氏物語は大部なので巻毎に担当を決めて写すこと）にも携わっており、親王、公家、連歌師等と共に源氏物語を書写している。

これらが永青文庫の源氏物語の要となっていることは疑いようのないところで、『源氏物語』が紫式部によって書かれて約六百年後の享受を示す貴重な典籍ということになる。

幽斎関係の源氏物語以外で、展示に供したものの一つとして、北村季吟の『源氏物語』がある。近世初期に『湖月抄』という今日まで最も流布した古注釈書を著した北村季吟筆の源氏物語は、最終帖夢浮橋が、一行毎に、(金・銀・朱(二種)・藍・墨・緑)の七色を使い分けて交ぜ書きされる。経典類は、金銀泥で一行ごと交互に色を変えて写されることがあるけれど、『源氏物語』の交ぜ書

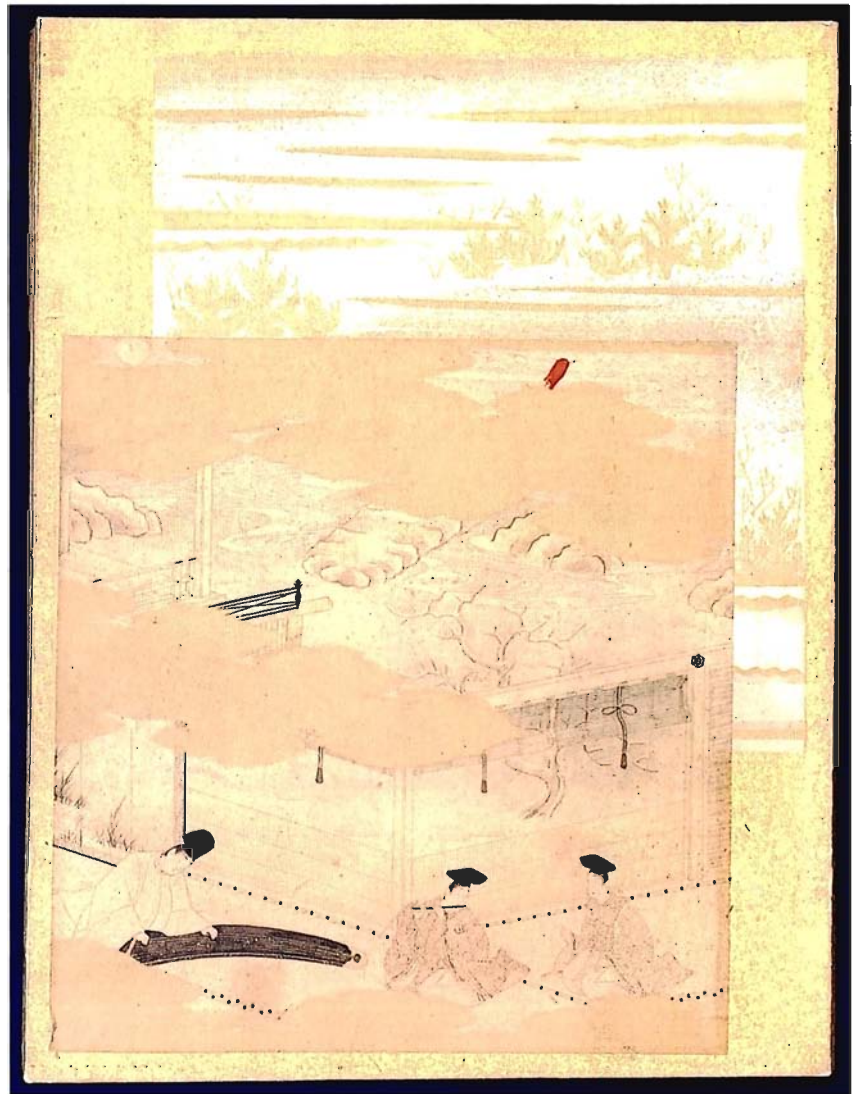
きは、寡聞にして知らない。五十四帖季吟一筆の当本は、七十一歳の折りの書写である。

さて、今回、初公開となったのが、土佐光起の源氏絵を表紙にあしらい、本文の書写は寛永の三筆である松花堂昭乗の筆にかかる五四帖である。以下、当本の覚え書きとしたい。

国宝源氏物語絵巻以来、源氏絵は時代を通じて描き継がれるが、ことに室町末期から江戸初期にかけて興隆を見る土佐派は、足利将軍の、のちには宮廷絵所預の絵師として活躍。特に源氏絵をお家芸としてもものした家である。土佐光信あたりから源氏絵が充実するとされるが、五十四帖揃いでは、その光信から光起まで今日わかっているだけで国内外合わせても10数組程度しか残っていない。その光起の源氏絵の出現は今回の展示の最大の収穫であった。

「細密画」とも「細画」ともいわれる筆致で、ほぼ枡形の狭い画面に描かれる源氏絵は、当時、フランシスコ・ザビエルがもたらした眼鏡を使って描かれたとされるが、この手法は光則によって確立された。また、土佐派の源氏絵は極彩色か白描で描かれることが多いが、この光起の源氏絵は淡彩に金泥が施されることにも注意を払いたい。

さらに、各々の巻の画面選択の特異さが際立ち、意図して製作されたものと考えられる。例えば、「須磨」巻では、須磨退去の折り、秋の夜、光源氏が一人琴を弾きながら謡う場面や海に見える廊に出て、沖行く舟や雁の列を眺める場面が描かれ



源氏物語「須磨」巻

ることが多いが、当本は、雪の降る日源氏が七弦琴を弾き、良清に歌わせ、惟光に笛を吹かせる場面を描く。

最後になったが、寛永の三筆について。寛永の三筆とは、寛永年間に活躍した書家、本阿弥光悦、松花堂昭乗、近衛信尋のこと。実は、先の寄合書に本阿弥光悦の朝顔巻が残され、寛永の二筆は、ここ永青文庫の源氏物語典籍の書写に携わっているわけである。遡って信尋の祖父前久は、寄合書に携わってもいる。